

朝日の遺跡Ⅱ

— 県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2） —

鍛冶屋廻り遺跡2次・本村遺跡5次の調査

2014年

日田市教育委員会



鍛冶屋廻り遺跡 2 次調査地周辺空中写真（南から）



本村遺跡 5 次調査地周辺空中写真（西から）



鍛冶屋廻り遺跡 2 次出土遺物集合写真



本村遺跡 5 次出土遺物集合写真

序 文

この報告書は、日田市教育委員会が平成24年度に県営経営体育成基盤整備事業朝日地区の工事実施に伴って、発掘調査を行った鍛冶屋廻り遺跡2次調査と本村遺跡5次調査の内容をまとめたものです。

鍛冶屋廻り遺跡では、今まで周辺で確認されていなかった弥生時代の遺跡が確認され、本村遺跡では、古墳時代のカマドが敷設された住居跡が発見されたほか、古代の水田に関する溝状遺構が確認されました。

これらの発見は、弥生時代、古墳時代から古代と小迫の谷部がどのように利用されてきたか、この地域の土地利用を知る上で貴重な成果となりました。

こうした発掘調査の内容をまとめた本書が、今後、文化財の保護や活用、朝日地区の歴史解明、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査中に来訪し指導をいただいた別府大学の田中裕介先生をはじめ、ご協力を賜りました朝日地区圃場整備組合や地元の皆様方、全ての関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成26年3月

日田市教育委員会

教育長 合原 多賀雄

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成24年度に実施した鍛冶屋廻り遺跡2次調査、本村遺跡5次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成24年度に県営経営体育成基盤事業朝日地区小迫工区の工事実施に伴い、大分県西部振興局の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり、実施した。
3. 調査に当たっては、朝日地区園場整備組合、市農業振興課にご協力を賜った。
4. 発掘調査は、上原が担当した。
5. 鍛冶屋廻り遺跡2次調査の発掘調査は、地形測量、メッシュ杭設置、平面遺構実測、個別遺構実測、土層実測を調査補助業務として株式会社九州文化財総合研究所に委託して実施し、空中写真撮影に関しては、株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託した。
6. 本村遺跡5次調査の発掘調査は、地形測量、メッシュ杭設置、平面遺構実測、個別遺構実測、土層実測、空中写真撮影を調査補助業務として株式会社埋蔵文化財サポート大分支店に委託した。
7. 遺構の写真撮影は上原が行った。
8. 本村遺跡5次の調査中に現地にて田中裕介氏（別府大学教授）にご指導・ご助言を賜った。
9. 鍛冶屋廻り遺跡2次調査ならびに本村遺跡5次調査の遺物実測・製図・写真撮影・遺構製図及び遺構図・遺物図の割付は株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託し、その成果品を使用した。
10. 挿図中の方位・文中の方位角は真北で示す。
11. 出土遺物、図面及び写真類は日田市埋蔵文化財センターに保管している。
12. 本書の執筆は1を若杉が行い、その他の執筆と全体の編集は上原が行った。



日田市の位置

本文目次

第1章 調査に至る経緯と組織	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の組織	2
(3) 発掘調査の経過	3
(4) 整理作業の経過	3
第2章 遺跡の立地と環境	4
第3章 鍛冶屋廻り遺跡2次の調査	6
(1) 調査の概要	6
(2) 遺構と遺物	7
第4章 本村遺跡5次の調査	14
(1) 調査の概要	14
(2) 遺構と遺物	14
第5章 総括	29
(1) 鍛冶屋廻り遺跡2次調査について	29
(2) 本村遺跡5次調査について	29

挿図目次

第1図 工事実施区域と調査区位置図 (1/8,000)	2
第2図 鍛冶屋廻り遺跡2次・本村遺跡5次調査周辺遺跡分布図 (1/25,000)	5
第3図 鍛冶屋廻り遺跡2次全体図 (1/200)	6
第4図 土坑実測図1 (1/60)	8
第5図 土坑実測図2 (1/60)	9
第6図 土坑出土遺物実測図 (1/60)	10
第7図 1号溝状遺構平面図及び断面図 (平面図 1/200、断面図 1/20)	11
第8図 1号溝状遺構、その他の出土遺物 (1,12～14が2/3、その他は1/3)	12
第9図 本村遺跡5次調査調査区全体図 (1/600)	14
第10図 1号竪穴建物跡実測図 (1/60)	15
第11図 1号竪穴建物跡カマド実測図 (1/30)	15
第12図 1号竪穴建物跡カマド出土遺物実測図 (1/3)	16
第13図 2号竪穴建物跡実測図 (1/60)	17
第14図 2号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1/3)	18
第15図 3号竪穴建物跡実測図 (1/60)	19
第16図 3号竪穴建物跡実測図 (1/60)	19
第17図 4号竪穴建物跡実測図 (1/60)	20
第18図 4号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1/3)	20
第19図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	21
第20図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	21

第21図	1号・2号溝状遺構平面図及び土層図（平面図：1/150・1/20、土層図：1/60・1/40）	22
第22図	3号溝状遺構実測図（平面図：1/100、断面図：1/40）	23
第23図	1号溝状遺構出土遺物実測図（1/3）	24
第24図	1号及び2号溝状遺構実測図（11～15が1/2、その他は1/3）	25
第25図	3号溝状遺構出土遺物実測図（5は1/2、それ以外は1/3）	26
第26図	1号土坑実測図（1/60）	27
第27図	1号土坑出土遺物実測図（1～3は1/3、4は1/2）	27
第28図	ピット出土遺物及び検出時の出土遺物実測図（1/2、1/3）	28

写真図版目次

巻頭写真図版1

鍛冶屋廻り遺跡2次調査地周辺空中写真（南から）

巻頭写真図版2

本村遺跡5次調査周辺地空中写真（西から）

巻頭写真図版3

鍛冶屋廻り遺跡2次出土遺物集合写真

巻頭写真図版4

本村遺跡5次出土遺物集合写真

写真1 現地案内会

写真図版1

鍛冶屋廻り遺跡2次調査地空中写真 真上から（上が北）

写真図版2

鍛冶屋廻り遺跡2次 3号土坑発掘状況（東から）

鍛冶屋廻り遺跡2次 4号土坑完掘状況（南から）

鍛冶屋廻り遺跡2次 5号土坑完掘状況（南から）

写真図版3

本村遺跡5次調査地空中写真真上から（下が北）

写真図版4

本村5次 1号竪穴建物跡発掘状況（南から）

本村5次 1号竪穴建物跡カマド発掘状況（南東から）

本村5次 2号建物跡完掘状況（南から）

写真図版5

本村5次 3号竪穴建物跡完掘状況（南から）

本村5次 4号竪穴建物跡完掘状況（西から）

本村5次 左：1・2号溝状遺構完掘状況（東から） 右：1号溝状遺構土層断面（東から）

写真図版6～10

出土遺物

表目次

第1表	泉峯経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う調査一覧	1
第2表	出土土器観察表1	30
第3表	出土土器観察表2	31
第4表	出土石器・石製品等観察表	31

第1章 調査に至る経緯と組織

(1) 調査に至る経緯

県営経営体育成基盤整備事業（担い手育成型）朝日地区（主管部署：大分県西部振興局農林基盤部、以下、県振興局）の事業の全体概要や埋蔵文化財調査に至る経緯に関しては、「朝日の遺跡1」で述べていることから註1)、ここでは、鍛冶屋廻り遺跡2次、本村遺跡5次調査に至る経緯を記述する。

小迫工区については、東側は周知の埋蔵文化財包蔵地（本村遺跡）に該当し、西側については包蔵地外であった。平成22年度に大分県教育庁文化課（以下、県文化課）が実施した農林業関係事業実施予定地の分布調査の結果、周知外を含むものの全体の予備調査が必要と判断された。

これを受け、日田市教育庁文化財保護課（以下、市文化財保護課）が予備調査を実施することとなり、前年度同様に福刈り後、平成23年12月20日から平成24年2月27日にかけて実施した。工事対象面積213,303㎡のうち、基本として工事により削平を受ける水田を対象にトレンチを設定した。最終的にはトレンチが46本、調査面積は約955㎡となった。これらのうち、遺物が出土したトレンチは34本、遺構については、大きく5カ所・12本のトレンチから確認された（第1図A～E、Eのみ本村遺跡該当）。遺構が確認されたA・Bの5本の内、2本のトレンチについては土坑・ピットが1基と検出数が少なかったことから完掘した。次にA・C・Eの11本の内、7本のトレンチについては、工事による削平が及ばないことから、盛土による保存対象となった。最終的にはAの1本、Dの2本の計3本のトレンチについてが、何れも工事による削平が及ぶことから発掘調査の対象になることとなった。遺構の確認されたA～Eについては、周知の埋蔵文化財包蔵地に該当していなかったことから、Aは鍛冶屋廻り遺跡を北側に広げ、B・C・Dは本村遺跡を西側に広げる範囲変更を行った。なお、この時点での調査対象面積は鍛冶屋廻り遺跡550㎡、本村遺跡3,000㎡とした。

そして平成24年3月6日付けでこの結果を県振興局長へ報告するとともに同日付けで、文化財保護法第94条の通知文を大分県教育委員会に提出した。その後、平成24年3月21日付けで発掘調査を実施する旨の通知があり、同年3月23日付けで県振興局長あてに伝達を行った。

以上の経過を経て、翌平成24年6月15日付けで鍛冶屋廻り遺跡、8月1日付けで本村遺跡の業務について、県振興局と委託契約を締結し、調査に着手した。また、本事業における発掘調査等の契約等の内容、平成26年3月時点において予備調査および発掘調査を実施及び予定しているのは、下の表のとおりである。

註1) 若杉竜太編『朝日の遺跡』1 平田遺跡・尾部田遺跡2次の調査 日田市埋蔵文化財調査報告書第108集 日田市教育委員会 2013

第1表 県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う調査一覧

工区	調査面積 (㎡)	発掘 年度 調査 年度	面積 (㎡)	手掘 面積 (㎡)	時代	地層	発掘調査等の委託契約				備考
							遺跡名	業務 内容	契約履行期間	発掘調査期間	
朝日1・2工区	177,844	H22	850	弥生～中世	一部、 発掘調査	花ノ木	発掘	H23.6.15～H24.3.19	H23.7.4～12.5	10,723	
						平田	発掘 整理	H23.6.15～H24.2.29	H23.10.3～12.24	2,749	
						尾部田	発掘 整理	H23.6.15～H24.1.23	H23.10.19～11.16	1,055	
小迫1・2工区	213,303	H23	955	弥生～古代	一部、 発掘調査	鍛冶屋廻り	発掘 整理	H24.6.15～H25.1.15	H24.7.22～8.24	560	
						本村	発掘 整理	H24.8.1～H25.2.29	H24.8.22～11.21	2,486	
						花ノ木	整理 報告書	H24.6.15～H25.3.26	-	-	朝日の遺跡1
						平田			-	-	
						尾部田			-	-	
若造工区	76,000	H24	219	中世	一部、 発掘調査	若造	発掘 整理	H23.7.1～H26.1.15	H25.8.19～11.12	580	
朝日1・2工区						花ノ木	整理		-	-	
朝日1・2工区						鍛冶屋廻り 本村	報告書	H25.6.1～H26.3.20	-	-	本報告書
2次工区											予備調査実施(平成26年度発掘調査予定)

(2) 調査の組織

調査関係者は以下の通りで、職名・氏名は当時のままとしている。

平成 24 年度 (2012) / 発掘調査

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原 多賀雄 (日田市教育委員会教育長)

調査統括 財津 俊一 (日田市教育庁文化財保護課長)

調査事務 土居 和幸 (同課埋蔵文化財係長)、井上 和泉 (同課主査)

調査担当 上原 翔平 (同課主事)

調査員 若杉 竜太 (同課主査・予備調査担当)

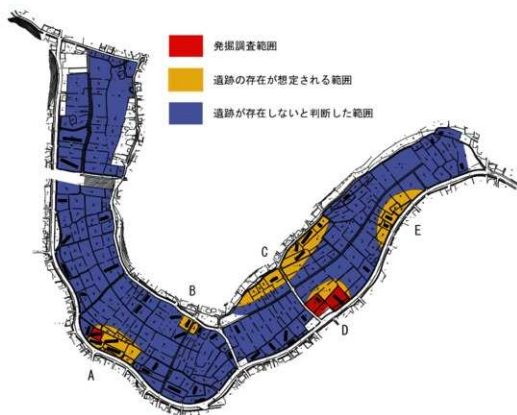
発掘作業員 [鍛冶屋廻り遺跡 2 次調査]

赤尾 ミチ子、秋吉 新六、石井 百合子、江藤 キミ子、蒲池 妙子、河津 モリ、北澤 幾子、黒瀬 順二、財津 真弓、竹本 和則、谷口 芳江、宮木 博幸、森山 敬一郎、

[本村遺跡 5 次調査]

赤尾 ミチ子、秋吉 新六、石井 百合子、伊藤 武士、江藤 キミ子、加藤 祐一、蒲池 妙子、河津 モリ、河津 良成、河津 博文、北澤 幾子、黒瀬 順二、合原 建国美、小暮 祐二、坂本 由紀子、財津 真弓、竹本 和則、谷口 芳江、谷口 ナツコ、長谷部 修一、原田 強、松下 宣男、宮木 博幸、森山 敬一郎、弥吉 直美

調査指導 田中裕介 (別府大学文学部教授)



第 1 図 工事实施区域と調査区位置図 (1/8,000)

平成 25 年（2013）／整理作業・報告書作成

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原 多賀雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括 財津 俊一（日田市教育庁文化財保護課）

調査事務 園田 恭一郎（同課埋蔵文化財係長）、武内 貴彦（同課専門員）、華藤善紹（同課副主幹）

報告書担当 上原 翔平（同課主任）

整理作業員 伊藤 一美、黒木 千鶴子、高田 美保、武石 和美、安元 百合

（3）発掘調査の経過

発掘調査・整理作業について、経過を以下に述べる。

鍛冶屋廻り遺跡 2 次調査

7 月 23 日 重機による耕作土除去を開始

7 月 26 日 作業員による遺構検出を開始

7 月 30 日 遺構の掘り下げを開始

8 月 1 日 博物館実習生（2 名）が来訪

8 月 16 日 博物館実習生（1 名）が来訪

8 月 20 日 空中写真撮影

8 月 24 日 基準点測量・遺構実測図作成開始

8 月 27 日 器材撤収後調査終了

本村遺跡 5 次調査

8 月 22 日 重機による耕作土除去を開始

8 月 30 日 作業員による遺構検出を開始

9 月 3 日 遺構検出を開始

9 月 7 日 一部遺構掘り下げを開始

9 月 21 日 博物館実習生（1 名）が来訪

10 月 3 日 基準点測量・遺構実測開始

10 月 30 日 地元を中心に現地案内会を開催（40 名参加）

11 月 6 日 空中写真撮影

11 月 7 日 器材撤収開始

11 月 12 日 田中裕介氏（別府大学教授）による現地調査指導

11 月 21 日 器材等の撤収を終えて、調査終了



写真 1 現地案内会

（4）整理作業の経過

整理作業は、翌年度の平成 25 年 6 月 1 日より開始した。最初に遺物の出土量の少ない鍛冶屋廻り遺跡 2 次調査の整理を開始し、翌 7 月 18 日にその整理を終了した。

本村遺跡 5 次調査の整理は、鍛冶屋廻り 2 次調査の整理に目処が着き始めた 7 月 2 日より平行して開始した。その後、遺構ごとに水洗・注記・接合と整理をしていき、10 月末にすべての整理を終了した。

なお、整理の過程で器面の剥落など脆くなっている遺物や接合時に不安定な遺物に関しては、バインダー処理や石膏などで補強を行っている。

第2章 遺跡の立地と環境

今回調査をおこなった鍛冶屋廻り遺跡・本村遺跡は日田市大字小迫に所在し、日田盆地の北部、吹上原台地と山田原(宮原)台地の谷部に位置している。

遺跡の所在する大字小迫は、日田市の地域区分上では朝日地区に含まれている。朝日地区は大字小迫(小迫町、朝日町、朝日ヶ丘、清岸寺町)をはじめ、大字二串(二串町、君迫町、北友田2丁目)、大字山田(朝日町、山田町)の3地域で構成されている^{註1)}。

この朝日地区は、明治22年～昭和15年の日田郡の自治体区分である朝日村(日田盆地の北部、筑後川〔三隈川〕支流二串川の中・下流域に位置する)の範囲を踏襲したもので^{註2)}、この朝日村は近世豊後国日田郡亘里郷内の村落として存在していた小迫・二串・山田村の3地域を明治22年に合併し誕生している。

このように朝日地区の歴史を辿ると古くは豊後国日田郡亘里郷の一部に位置していたことが分かる。また、亘里郷という地名は古代日田五郷の一つとして『和名類聚抄』にも記されている^{註3)}。

以下には、朝日地区に所在する主な遺跡について時代ごとに概観していく

旧石器・縄文時代の遺跡は、朝日地区内では大分県教育委員会が高速道路建設にともない、昭和58年(1983年)に二串西原遺跡の調査をおこなっており、旧石器時代後期～終末期に属する石器(ナイフ形石器、台形様石器、細石刃など)が10数点確認されている^{註4)}。縄文時代の遺跡は、平成12年(2000年)におこなわれた尾部田遺跡の調査で縄文時代の集落が確認され、縄文時代の集落立地を考える上で貴重な例となった^{註5)}。

弥生時代の遺跡は、日田盆地吹上原台地に所在し、弥生時代を通じて拠点的な集落を営んだと考えられる吹上遺跡が挙げられる。平成7年(1995年)におこなわれた6次調査では、銅剣や銅矢・貝輪など豪華な副葬品を有する喪棺墓で構成される特定集団墓が確認され、台地一帯が地域の中心的位置を占めていたと考えられる^{註6)}。また、平成12年(2000年)、平成13年(2001年)におこなわれた本村遺跡の調査では、辻原台地と吹上原台地の谷部に位置する沖積地上で調査がおこなわれ、弥生時代後期～終末期の遺構が検出された^{註7)}。

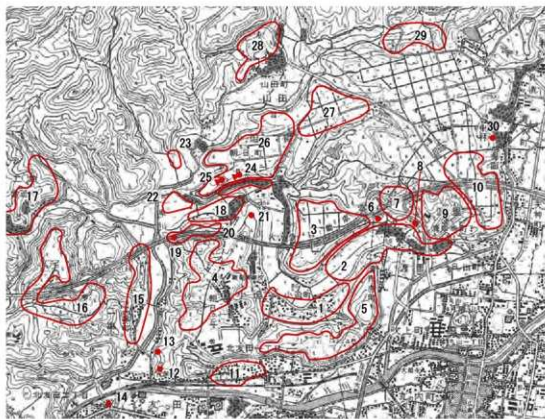
古墳時代に入ると、朝日地区では小迫辻原遺跡や朝日天神山古墳群といった日田市を代表する遺跡が登場する。吹上遺跡の所在する吹上原台地の北側、辻原台地上に所在する小迫辻原遺跡では、弥生時代末～古墳時代初頭にかけて営まれた三つの方形環濠建物、三つの環濠集落とこれらを区画するように掘り込まれた溝が2条確認されており、古墳時代初頭頃の国家形成期の社会状況を解明する上で重要な集落が所在していたと考えられる^{註8)}。また、平成13年(2001年)におこなわれた尾部田遺跡の調査では、小迫辻原遺跡と同時期の集落の存在が台地の下、沖積地上でも確認され、小迫辻原遺跡と同時期の集落の存在が沖積地上に展開する様相などが明らかになった。

6世紀中頃には、宮ノ原台地上にこの時期では県下最大級の朝日天神山古墳1号墳が築かれる。1号墳からは、大和政権とのつながりを考えることの出来る三輪玉が出土しており、その後の6世紀後半に2号墳が築かれ、周溝からは埴輪の代わりと考えられる大型平底壺が出土している^{註9)}。

古代になると小迫辻原遺跡では、大型掘立柱建物跡が検出され、そこから『大領』と書かれた土器が出土している。この建物群は、規模やその規則的な配置から、郡司クラスの人物の居宅と想定されている。そのほか、中世では建物群を堀や溝で囲んでいる屋敷跡が6ヶ所確認されるなど、古代から中世にかけても当時の社会生活を知る貴重な成果が挙がっている。また、朝日宮ノ原遺跡B地区で青磁や湖州鏡や合子などが一括で副葬された土坑墓が発見され^{註10)}、近世においては「鍛冶屋廻り遺跡」で道路や水路などが発見されている^{註11)}。

このように、朝日地区は小迫辻原遺跡や朝日天神山古墳が所在するなど、日田市の歴史を知る上で重要な地区であるといえる。

- 註1) 日田市町名に関する告示 平成13年3月13日 告示第19号
 註2) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会「角川日本地名大辞典4大分県」角川書店 1980(昭和55年)
 註3) 日田市「日田市史」1990(平成2年)
 註4) 「九州横断自動車道路建設に伴う発掘調査概報」大分県教育委員会 1984(昭和59年)
 註5) 行時志郎「尾部田遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書34集 日田市教育委員会2001(平成13年)
 註6) 渡邊隆行「吹上IV-吹上遺跡6次調査の記録」日田市埋蔵文化財調査報告書70集 日田市教育委員会2000(平成18年)
 註7) 若杉竜太「本村遺跡3次」日田市埋蔵文化財調査報告書51集 日田市教育委員会 2004(平成16年)
 註8) 田中裕介・上原和幸・清水宗昭「小迫辻原遺跡1」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10
 大分県教育委員会 1999(平成11年)
 註9) 若杉竜太編「朝日天神山古墳」日田市埋蔵文化財調査報告書第60集 日田市教育委員会 2005(平成17年)
 註10) 上原和幸編「朝日宮ノ原遺跡・谷ノ久保遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書 第104集 日田市教育委員会 2012(平成24年)
 註11) 若杉竜太「鍛冶屋廻り遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書 第92集 日田市教育委員会 2010(平成22年)



1 鍛冶屋廻り遺跡	11 今泉遺跡	21 城ノ越古墳
2 本村遺跡	12 片山石棺	22 花ノ木遺跡
3 小迫辻原遺跡	13 鳥越古墳	23 平田遺跡
4 朝日ヶ丘遺跡	14 三郎丸古墳	24 朝日天神山1号墳
5 吹上遺跡	15 二串西原遺跡	25 朝日天神山2号墳
6 草場原古墳	16 山ノ神(二串)遺跡	26 朝日宮ノ原遺跡
7 草場第2遺跡	17 君迫遺跡	27 山田原遺跡
8 草場古墳	18 尾部田遺跡	28 山ノ口遺跡
9 草場第1遺跡	19 小迫古墳	29 谷ノ久保遺跡
10 後迫遺跡	20 小迫横穴墓群	30 用松中村古墳

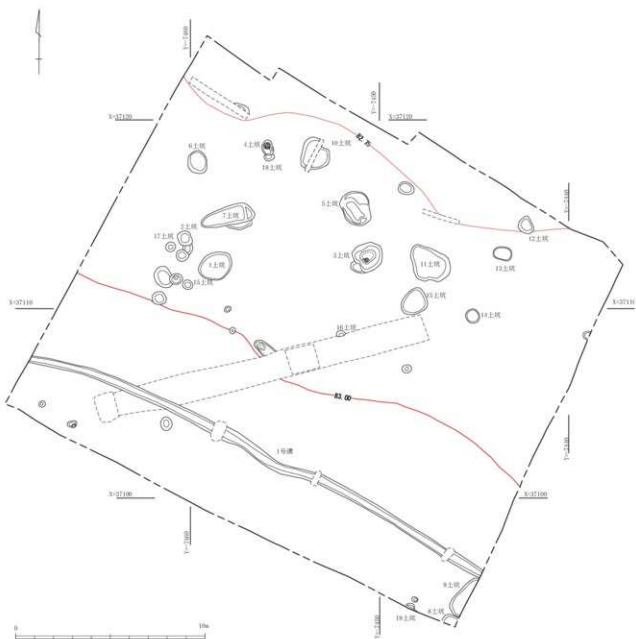
第2図 鍛冶屋廻り遺跡2次・本村遺跡5次調査周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第3章 鍛冶屋廻り遺跡 2次の調査

(1) 調査の概要 (第3図)

調査は、小迫工区の西側に位置する区画内の、560㎡を対象に行なった。遺構検出面までは、重機を用いて除去作業を行った。耕作土と厚さ20cm前後の灰褐色土層および厚さ約20cm前後の暗灰褐色土層を検出した。その後、地表面より65cm下で黄白色粘質土の遺構検出面を確認し、検出作業を行なった。(標高83m前後)遺構の埋土は、黒褐色粘質土であった。

調査区はほぼ正方形を呈しており、緩やかに南から北に向かって傾斜している。遺構は主に土坑19基、溝状遺構1条、ピットを数基検出している。



第3図 鍛冶屋廻り遺跡 2次全体図 (1/200)

(2) 遺構と遺物

1号土坑 (第4図)

調査区の中央よりやや北西側に位置する。東西1.8m×南北1.4mで平面形状はやや楕円形を呈する。底面は西から東にかけて緩やかに傾斜しており最も深い所で検出面より約65cmを測る。弥生土器片が出土しているが図示できる遺物は出土しなかった。

2号土坑 (第4図)

調査区の西側に位置する。東西0.8m×南北0.7mで平面形状はほぼ円形を呈する。底面は南から北側に向かって傾斜しており、最も深いところで検出面より約24cmを測る。

出土遺物 (第6図、図版7)

1、2ともに弥生土器の甕である。1は口縁部から胴部にかけて残存しており、頸部から胴部までの最大径はほとんど変わらず胴。外面に縦方向のハケを施す。2は胴部から底部まで残存しており外面底部付近に黒斑が残る。

3号土坑 (第4図、図版4)

調査区の中央よりやや北に位置する。東西約3.8m×南北3.0mの規模で平面はほぼ円形で底部は船底状を呈している。深さは地表面より約70cmを測る。底部付近で土器が出土している。

出土遺物 (第6図、図版7)

3は弥生土器の甕である。口縁部は欠損しているが、胴部から底部にかけて1/2ほど残存している。

4号土坑 (第4図、図版4)

調査区の北側に位置する。南北約1.6m×東西1.2mの規模で平面は楕円形で床面は平面だが、中央部に段落ちがある。深さは地表面より24cmを計り南側ではビットを切っている。また、段落ちの深さは約50cmを測る。

出土土器 (第6図、図版7)

4は弥生土器の甕である。口縁部はほぼ欠損している。外面胴部から底部にかけて黒斑が残る。

5号土坑 (第4図、図版4)

調査区の北側に位置する。南北1.8m×東西1.4mの規模で平面は楕円形で床面は船底状を呈する。深さは検出面から約24cmを測る。図示が可能な遺物は確認されなかった。

6号土坑 (第4図)

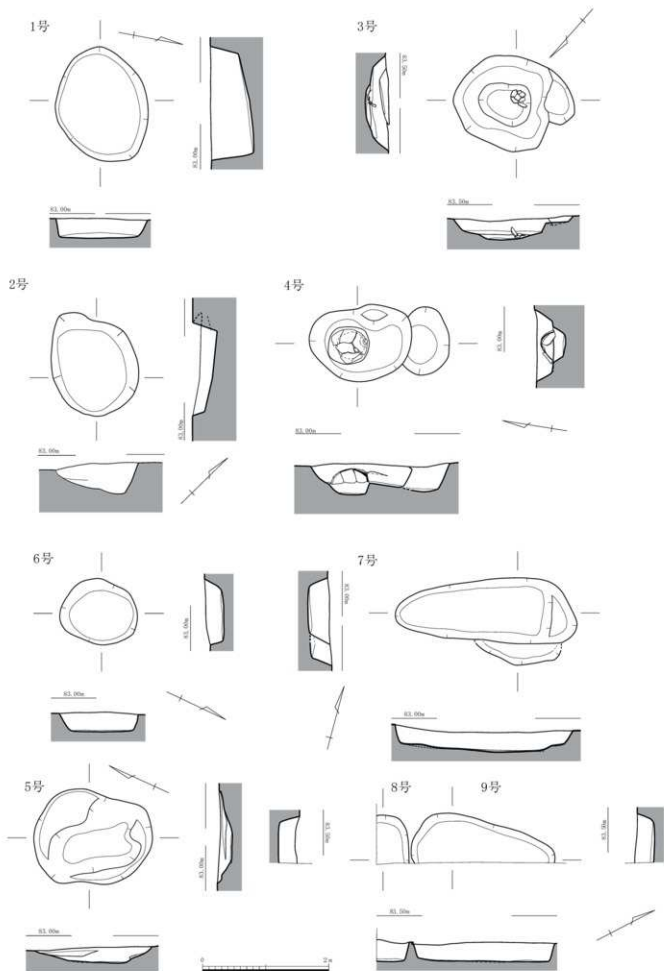
調査区の北西側に位置する。南北約1.2m×東西約1.0mの規模で平面は円形、底面は平坦である。深さは遺構検出面から約30cmを測る。

出土土器 (第6図、図版7)

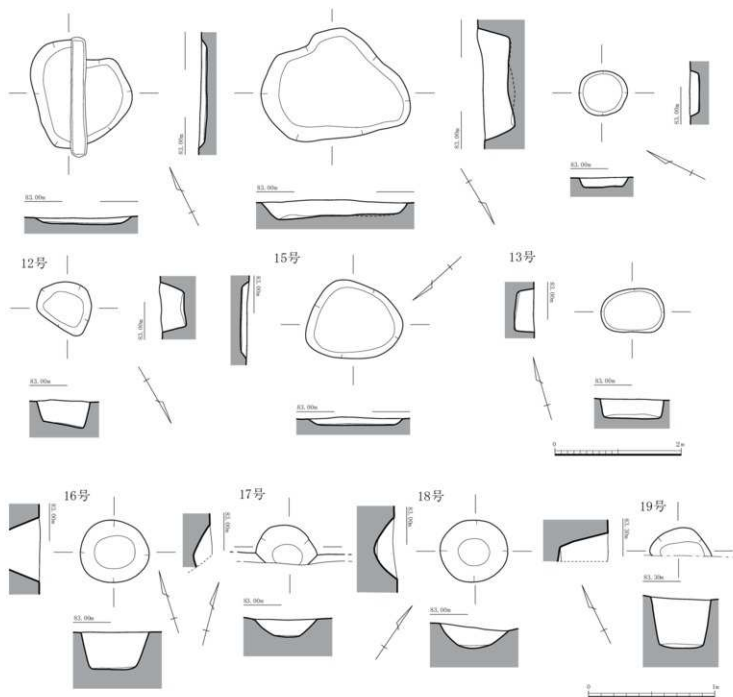
5は弥生土器の甕である。頸部に刻み目突帯を施す。胴部にはタタキが施されている。

7号土坑 (第4図)

調査区の北西側、1号土坑の北側に位置する。東西約2.8m×南北約1.0mの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦。



第4図 土坑実測図1 (2号、4号は1/30、それ以外は1/60)



第5図 土坑実測図2 (16～19号は1/30、10～15号は1/60)

深さは地表面より約24cmを測る。南側ではピットを一部切っている。図示可能な出土遺物は確認されなかった。

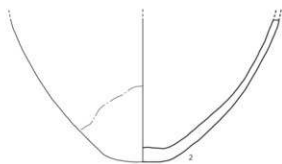
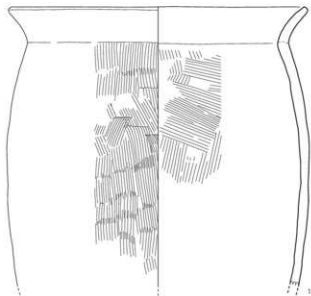
8号土坑 (第4図)

調査区の南東隅に位置する。検出されたのは全体の約4分の1程度でそれ以外は調査区外に伸びるため平面形状は不明である。底面は平坦で深さは検出面より約30cmを測る。

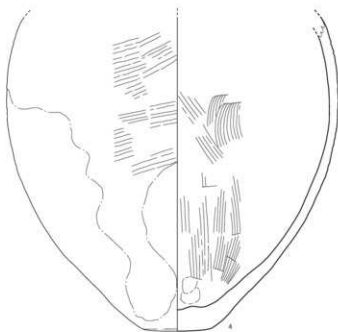
出土遺物 (第6図、図版7)

6は弥生土器の甕である。口縁部のみ残存しており、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。

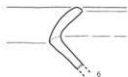
2号土坑



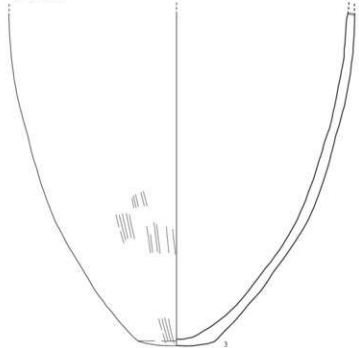
4号土坑



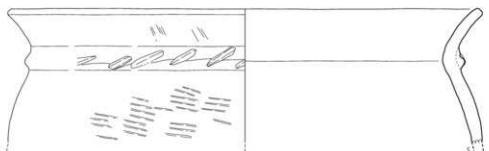
8号土坑



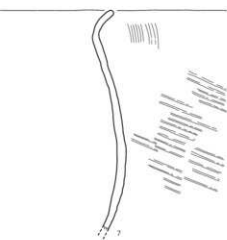
3号土坑



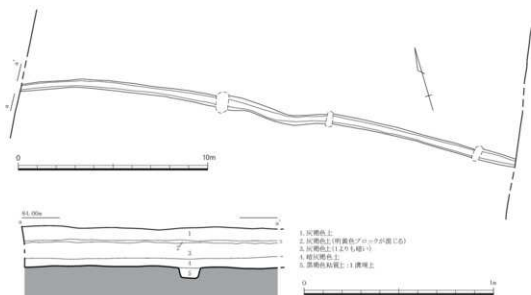
6号土坑



10号土坑



第6图 土坑出土遗物实测图 (1/3)



第7図 1号溝状遺構平面図及び土層図 (平面図 1/200、土層 1/20)

9号土坑 (第4図)

調査区の南東隅、6号土坑の北側に隣接する。検出されたのは全体の約半分で、南北約2.2m×東西0.8m+αの規模を測る。平面形状は楕円形を呈すと考えられる。底面は平坦で深さは検出面より約30cmを測る。

10号土坑 (第5図)

調査区の北側に位置する。南北1.75m×東西1.6mで平面形状はほぼ円形を呈する。底面は平坦で、深さは検出面より約10cmと浅い。

出土遺物 (第6図、図版7)

7は弥生土器の裏である。口縁部から胴部にかけて残存しており、外面にタタキを施す。

11号土坑 (第5図)

調査区の中央よりやや北側に位置する。東西2.4m×南北1.7mで平面形は不定形、底面は凹凸が見られる。深さは検出面より最も深い所で50cmを測る。図示可能な遺物は確認されなかった。

12号土坑 (第5図)

調査区の北側に位置する。東西0.85m×南北0.8mで平面形状はいびつな楕円形状を呈する。底面は東から西に向かって緩やかに傾斜しており、最も深い所で検出面より約40cmを測る。図示可能な遺物は確認されなかった。

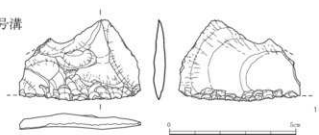
13号土坑 (第5図)

調査区の北側、12号土坑よりやや南に位置する。東西1.0m×南北0.7mで平面形状は楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは検出面より約30cmを測る。図示可能な遺物は確認されなかった。

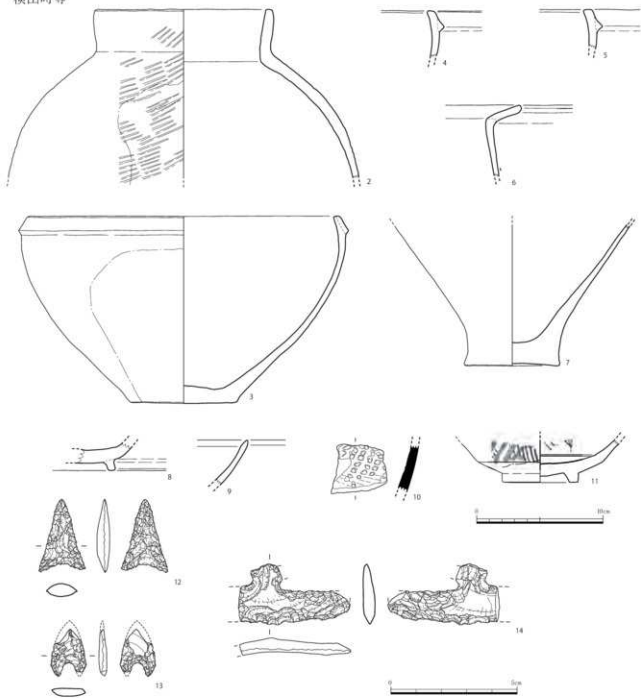
14号土坑 (第5図)

調査区の東側に位置する。東西0.7m×南北0.75mで平面形状はほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは検出面より約10cm前後を測る。図示可能な遺物は確認されなかった。

1号溝



検出時等



第8図 1号溝状遺構、その他の出土遺物 (1,12～14が2/3、その他は1/3)

15号土坑（第5図）

調査区の中央よりやや北側、9号土坑の南側に位置する。東西1.2m×南北1.4mで平面形状は楕円形を呈する。底面は平坦で深さは検出面より約10cmを測る。図示が可能な遺物は確認されなかった。

16号土坑（第5図）

調査区の中央よりやや西側に位置する。東西0.55m×南北0.5mで平面形状はほぼ円形を呈する。底部は平坦で深さは検出面より約30cmを測る。なお、図示可能な遺物は確認されなかった。

17号土坑（第5図）

調査区の中央に位置する。東西0.5m×南北0.3m+ α で南側の一部を予備調査時のトレンチによって削平を受けている。底部までの深さは検出面より約25cmを測る。図示が可能な遺物は確認されなかった。

18号土坑（第5図）

調査区の中央よりやや西側に位置する。東西0.55m×南北0.5mで平面形状はほぼ円形を呈する。底部までの深さは検出面より約15cmと浅い。図示が可能な遺物は確認されなかった。

19号土坑（第5図）

調査区南端に位置し、その南半分が調査区外に広がる。調査区で確認される規模は、東西0.5m×南北0.2m+ α を測る。底部は平坦で、深さは検出面より40cmを測る。図示可能な遺物は確認されなかった。

1号溝状遺構（第7図）

調査区を東西に横切る溝で、緩やかではあるが東から西に向かって傾斜している。長さは26m+ α で幅は約0.4mを測る。深さは検出面より約20cm前後で浅い。幅は約0.5mを測る。

出土遺物（第8図、図版7）

1はスクレイパーである。1/2ほど残存している。石材は安山岩である。

その他の出土した遺物（第8図、図版7、8）

上記以外に調査区から検出時や廃土中より複数の遺物が出土している。

2は弥生土器の壺である。外面胴部にタタキが施される。3～5は弥生土器の鉢である。3の外面には胴部から底部にかけて黒斑が残る。6、7は弥生土器の甕である。7は底部のみ残存しており、底部は平底でやや厚い。8は土師質土器の高台付き碗である。9は土師器の碗、10は須恵器の甕胴部破片、11は青磁器の碗である。内面に貫入が確認される。12、13は石鏃で石材は12が黒曜石、13は安山岩である。14は石匙で、石材は安山岩である。

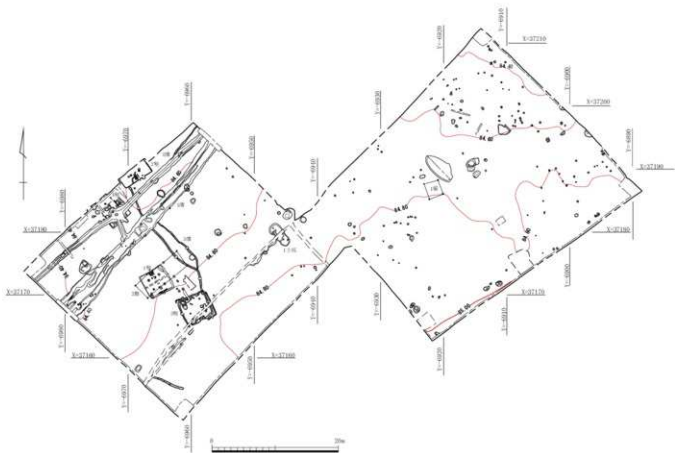
第4章 本村遺跡5次の調査

(1) 調査の概要 (第9図)

調査は、小迫工区の東側に位置する区画の内、2,498㎡を対象に行った。遺構検出面までは、耕作土、厚さ20cm前後の暗茶灰色土層、暗灰色土の水田層と水田基盤層の堆積を確認した。現地盤より約50cm下で黄白色粘質土の遺構検出面を確認し、遺構の検出をおこなった。(標高84m前後)

調査区は大きく東側と西側に分かれており、山に近い東側から西側に向かって緩やかであるが傾斜している状況が確認された。埋土は、大きく黒褐色土と灰褐色土に分かれており、

遺構は主に西側で確認されており、竪穴建物跡4軒、掘立柱建物跡2棟、土坑1基、溝状遺構2条のほかピットを多数検出している。



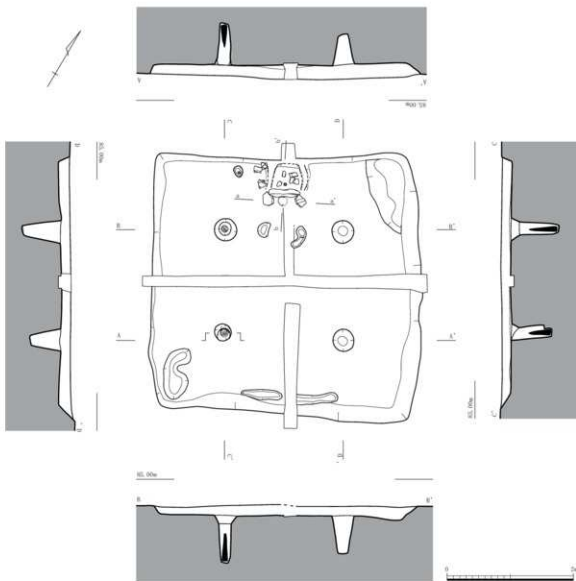
第9図 本村遺跡5次調査調査区全体図 (1/600)

(2) 遺構と遺物

1号竪穴建物跡 (第10・11図、図版5)

調査区の西側に位置し、東西約4.3m×南北4.1mのほぼ正方形を呈する。床面までの深さは約20cmを測る。東隅に不定形な窪みがあり、東端に向かって緩やかに傾斜している。埋土は、黒褐色土を呈する。

主柱穴は4本確認され、柱穴の規模は約35cmで床面からの深さは50cm～80cm、東西の柱穴間は中心距離で

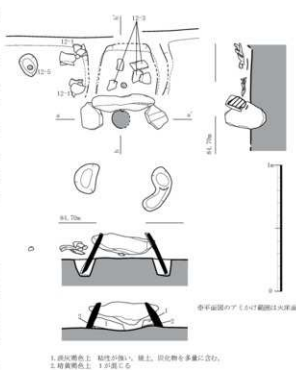


第10図 1号竪穴建物跡実測図 (1/60)

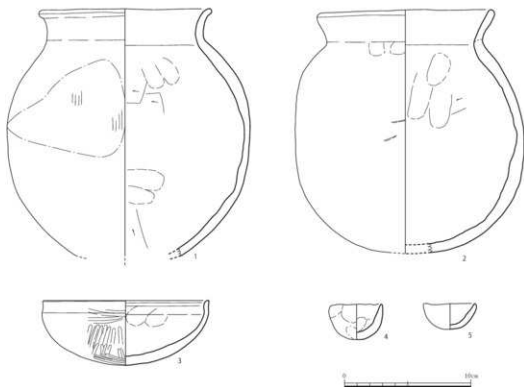
約 1.9 m、南北の柱穴間は中心距離で約 1.6 mを測る。その内、西側の 2 本からは、柱木が出土している。材質はケヤキである。カマドが北側中央に敷設されており、暗黄灰色土の袖が両端で残存し、先端には大きさ 50cm 程度の袖石も残っていた。石材は安山岩か。両袖間の距離は 0.8 m で袖の長さは 1.1 m を測る。また、約 1 m の天井石が両袖石に引っかかるような形で検出されており、カマドを廃棄する際に落ち込んだものと考えられる。両袖石の間、中央付近でわずかながら火床面が確認される。支柱は、抜取痕なども含めて確認できなかった。

出土遺物 (第12図、図版8)

1~2は土師器甕である。1はカマド周辺で出土した。口縁部が緩やかに外反しながら立ち上がる。胸部最大径はほぼ中央で測る。外面胸部に一部黒斑が残る。2は口縁部が外反せず上方に向かって立ち上がる。外面頸部付近に指頭圧痕が残る。3は土師器杯である。カマド内で出土した。口縁部は



第11図 1号竪穴建物跡カマド実測図 (1/30)



第12図 1号竪穴建物跡カマド出土遺物実測図(1/3)

若干外反しているがほぼ垂直に立ち上がる。外面にミガキが施され、内面口縁付近で指頭圧痕が見られる。

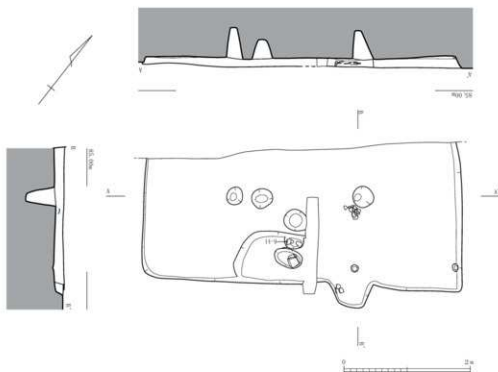
4、5は土師器碗である。共にミニチュア土器で5は内外面に指頭圧痕が残り、底部付近に黒斑が残る。

2号竪穴建物跡(第13図、図版6)

調査区の北西に位置し、北側が調査区外にのびており、南側半分だけ検出している。確認が可能な範囲だけで東西約5.0m×南北2.0m+aで、床面までは約20cmを測る。全体の形状を確認することはできないが、柱穴が2本検出されていることから、調査区外に対となる柱穴がある4本柱の住居跡であると考えられる。柱穴の規模は20～30cmで床面からの深さは約50cm、これら柱穴の中心距離は1.95mを測る。南側中央に屋内土坑を有し、その深さは約10cmである。埋土は黒褐色土を呈する。

出土土器(第14図、図版8、9)

1～5は土師器甕である。1、2は口縁部がやや外反しながら立ち上がる。口縁部の厚みが胴部に対して厚い。2は内部頸部付近に接合痕が残る。3は口縁部がやや外反しながら垂直に立ち上がる。4は口縁部が強く外反しながら立ち上がる。内面に頸部下方に横方向のケズリが施される。5は頸部付近に接合痕が残る。6～12は土師器杯である。6、7は口縁部が垂直に立ち上がる。8、9も垂直に立ち上がり、頸部に稜線がある。10は外側に向かって垂直に立ち上がる。11は口縁部が外反して立ち上がる。12は口縁部が内湾して立ち上がる。7、10、12の外面胴部には黒斑が残る。13は土師器鉢である。口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部外面に指頭圧痕が残る。14はミニチュア土器である。15は土製模造鏡で、ほぼ穹形で出土している。



第13図 2号竪穴建物跡実測図 (1/60)

3号竪穴建物跡 (第15図、図版6)

調査区の西側、1号竪穴建物跡よりすぐ南に位置し、東西約5.0m×南北4.5mのほぼ正方形を呈する。壁面は後世に削平を受けたものと考えられ、確認することができなかった。4本の主柱穴と2条の周溝を検出している。この周溝は後述する3号溝状遺構と接続している。また、建物南側の一部を東西に走る現代の水田区割り(カクラン)の影響を受けている。

主柱穴の規模は20cm前後で深さは検出面より約30cm前後、柱穴間の中心距離は東西約2.4mで南北約2.7mを測る。建物跡を巡る周溝は、幅0.2m前後でその深さは約10cm～20cm前後と浅い。前述したように、周溝は2条巡っており、南側中央と北側中央付近の平面に焼土が混じる粘質土と焼土面が一部に確認されている事から、この建物跡では、カマド(または炉)の位置変更をとまなう建て替えが行なわれたと考えられる。

出土遺物 (第16図、図版9)

1は土師器環である。口縁部は若干内湾しながら立ち上がる。外面胴部に横方向のケズリが施される。

4号竪穴建物跡 (第17図、図版7)

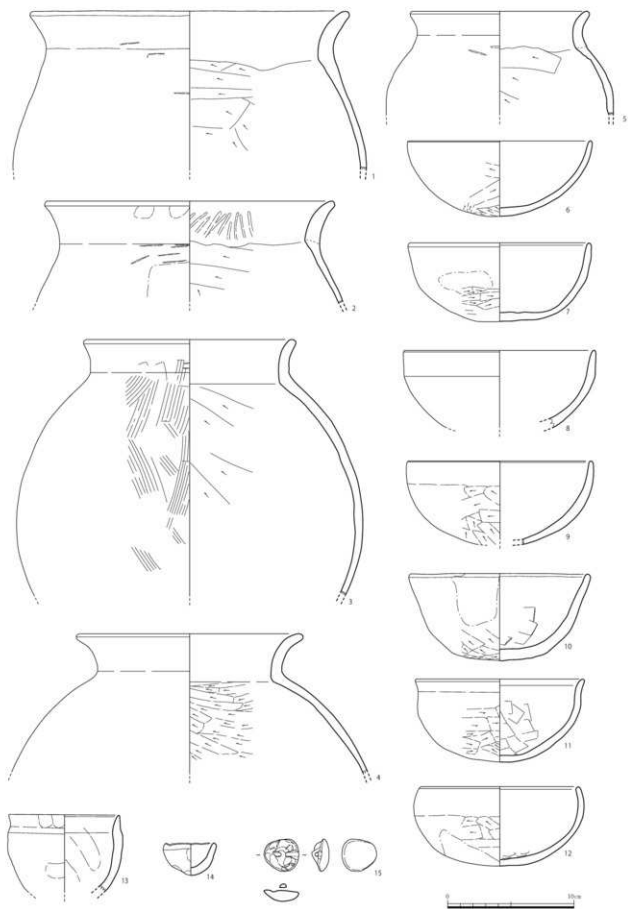
調査区西側に位置し、東西3.75m×南北3.0m+aの規模を呈し、床面までの深さは10cm前後を測る。中央部を2号溝状遺構によって切られている。埋土は黒褐色土を呈する。

この建物跡は、他の建物跡と違い主柱穴が確認されていない。建物跡の北側では、粘土と炭化物がまとまって出土しているが、袖石や火床面などカマドにとまなうものは確認できなかった。

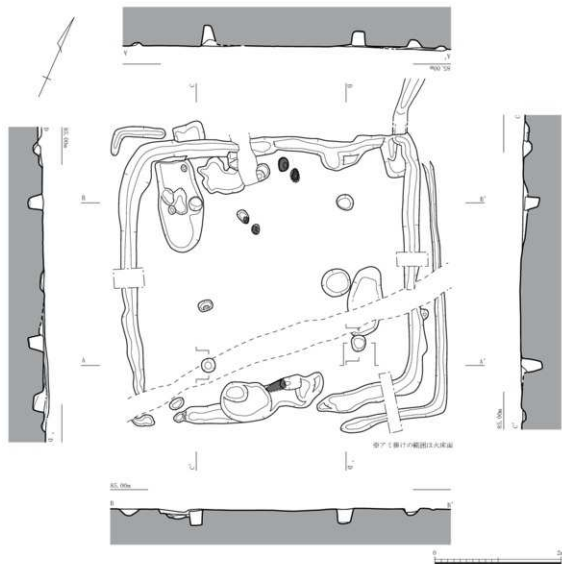
出土遺物 (第18図、図版9)

2号溝状遺構に中央部を大きく切られており、確実に4号竪穴建物跡出土の遺物であり、図示できるものは以下の2点のみである。

1は土師器甕である。口縁部を外反しながら立ち上がる。内面に指頭圧痕が残る。2は土師器環である。口縁部は内湾しながら立ち上がる。



第14图 2号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1/3)



第15図 3号竪穴建物跡実測図 (1/60)

1号掘立柱建物跡 (第19図)

調査区東側に位置する。柱間が1間×1間の掘立柱建物跡と考えられる。これらの柱穴の規模はいずれも約20cmの大きさで、深さは50cm前後、柱穴間の距離は、2.3m～2.5mを測る。周溝やが跡などは確認されていないが、柱穴の並びから竪穴建物跡の可能性も考えておきたい。なお、遺物は出土しなかった。



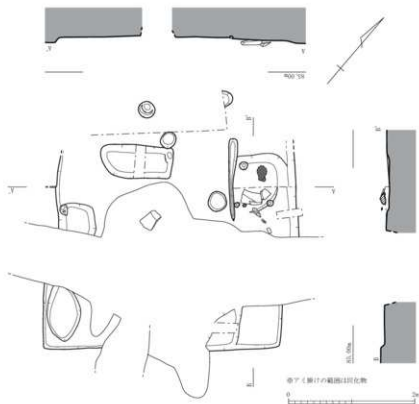
第16図 3号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1/3)

2号掘立柱建物跡 (第20図)

調査区の西側、1号竪穴建物跡と3号溝状遺構に一部掛かる形で東西に伸びる。柱間が1間×3間の掘立柱建物建物跡である。柱穴の大きさはいずれも約0.2mで、深さは検出面より約20cm前後を測る。柱穴の中心距離が約2.6m前後である。なお、遺物は出土していない。

1号溝状遺構 (第21図、図版7)

調査区の西側に位置し、東から西に流れる長さ35m+aの溝である。幅は約2.0m～4.0mで、深さは50cm～70cmを測る。この遺構は後述する2号溝状遺構と平行して検出され、東から20m付近で北側に張り出し、2号溝状遺構と接続する。調査区西側の土層から近・現代の攪乱によって溝が切られている状況が確認された。



第17図 4号竪穴建物跡実測図 (1/60)



第18図 4号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1/3)

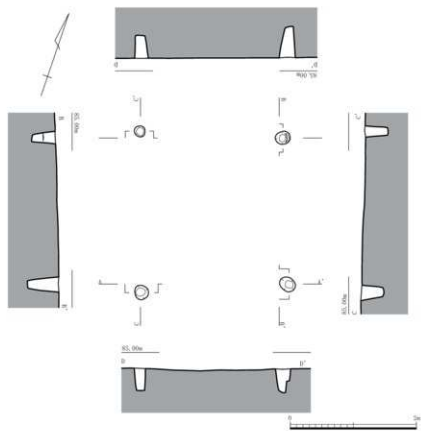
この土層で確認された5～7は、東側の土層の4～6に対応すると考えられる。

また、調査区東壁から約5m地点から西に約10mの間、1号溝状遺構の底部を1段掘り込んだような幅40cm～50cm、深さ30cm前後の溝が検出された。この掘り込み部分からは5世紀代の遺物が出土していることから、時期の異なる古墳時代中期頃の溝が底部のみ残存したものと考えられる。溝の規模について、東壁・西壁の土層では、掘り直しなどの不整合面を明確に確認することが出来なかった。しかし、この溝が確認されていない調査区西側の下層からも5世紀代の遺物が出土していることから、1号溝状遺構と同様に東西に伸びていた可能性が考えられる。あるいは、東壁の6層、西壁の7層が溝の埋土に対応する可能性もある。

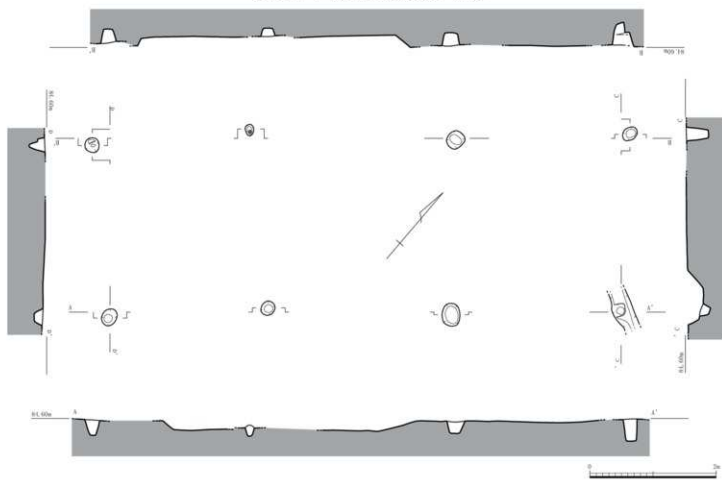
出土遺物 (第24、25図、図版10、11)

1～8は土師器甕である。1は口縁部が内湾しながら立ち上がる。2～7は口縁部が外反しながら立ち上がる。

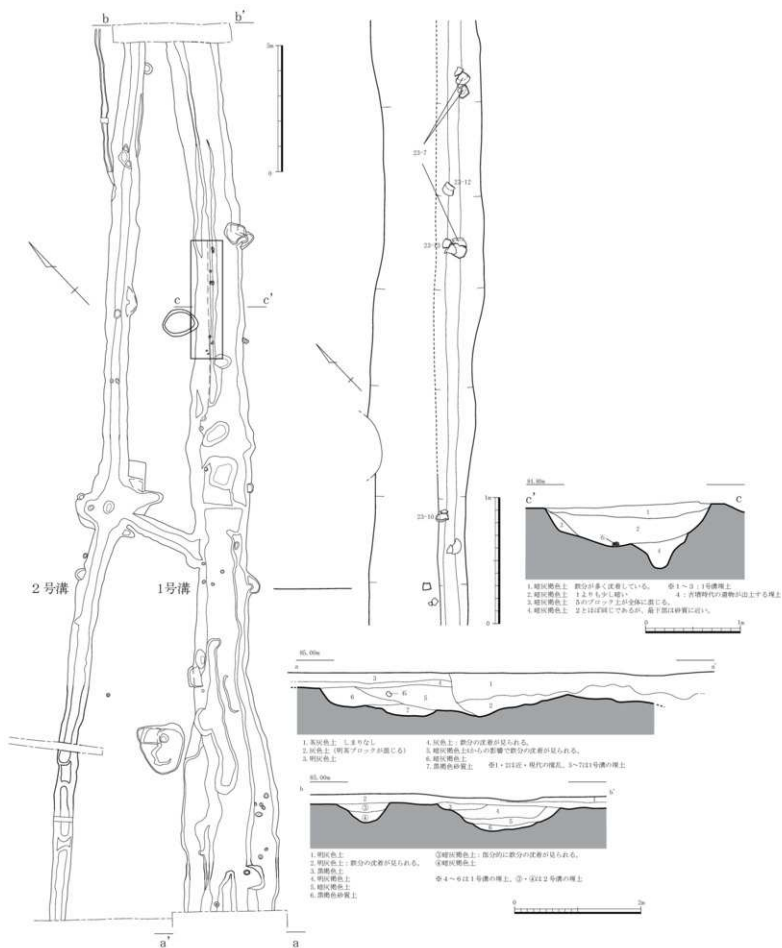
また、4は頸部に接合痕が残る。8は口縁部が緩やかに外反し立ち上がる。胴部最大径は中央よりやや上位で測る。内面底部付近に指頭圧痕が残り、外面口縁部から胴部にかけてスガが付着する。9は土師器甕で、小型丸底甕の口縁部と考えられる。10～12は手捏ね土器である。13～18は、土師器坏でいずれも口縁部が若干



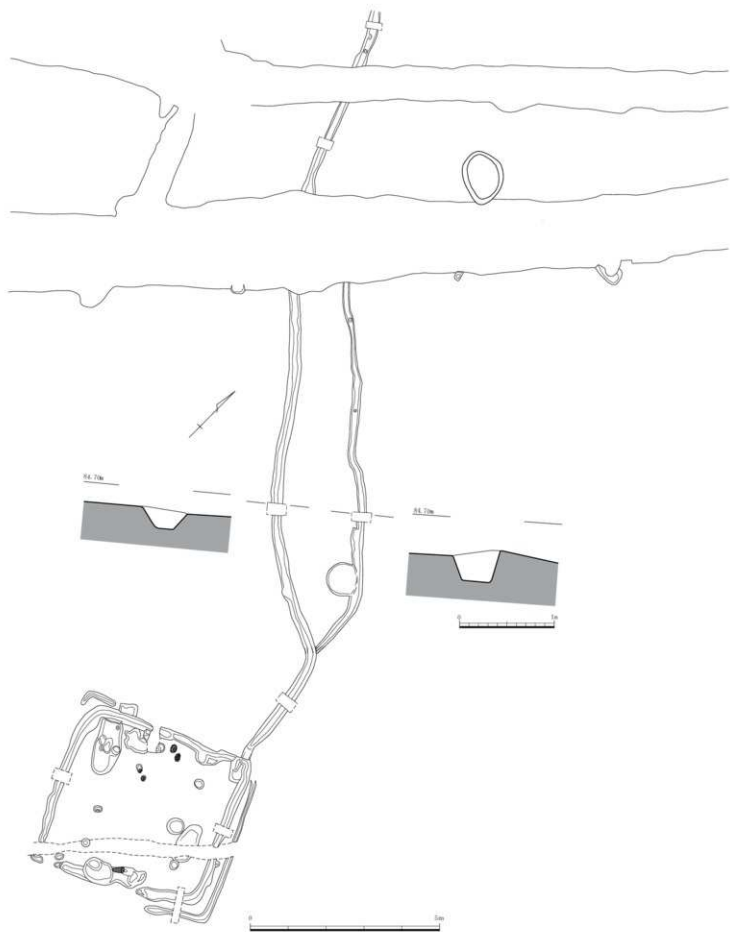
第 19 图 1号掘立柱建物跡实测图 (1/60)



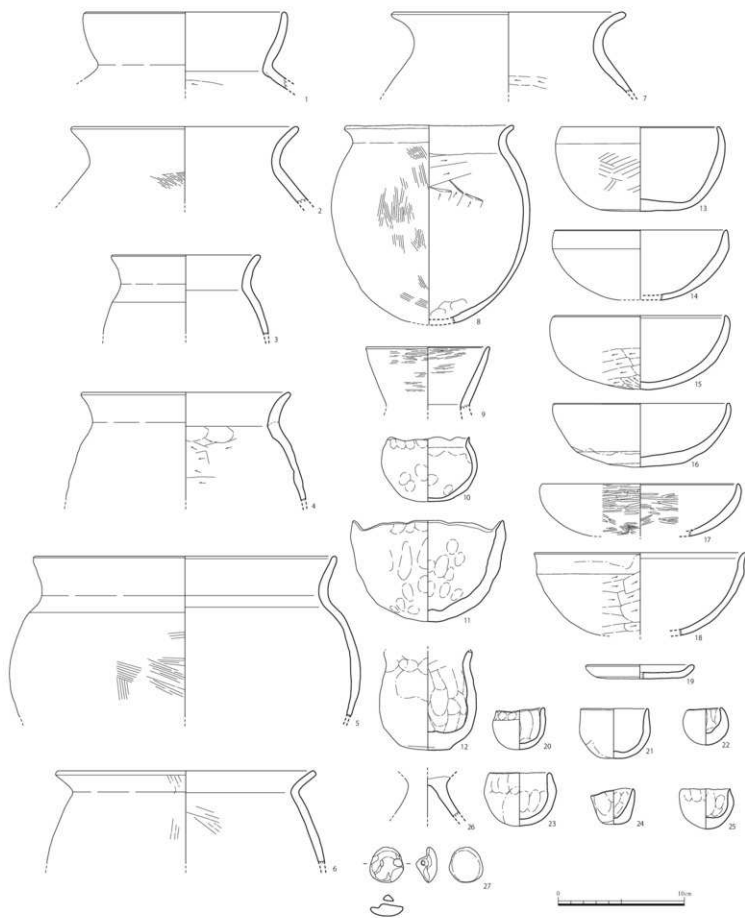
第 20 图 2号掘立柱建物跡实测图 (1/60)



第21図 1号・2号溝状遺構平面図及び土層図 (平面図: 1/150・1/30、土層図: 1/60、1/40)

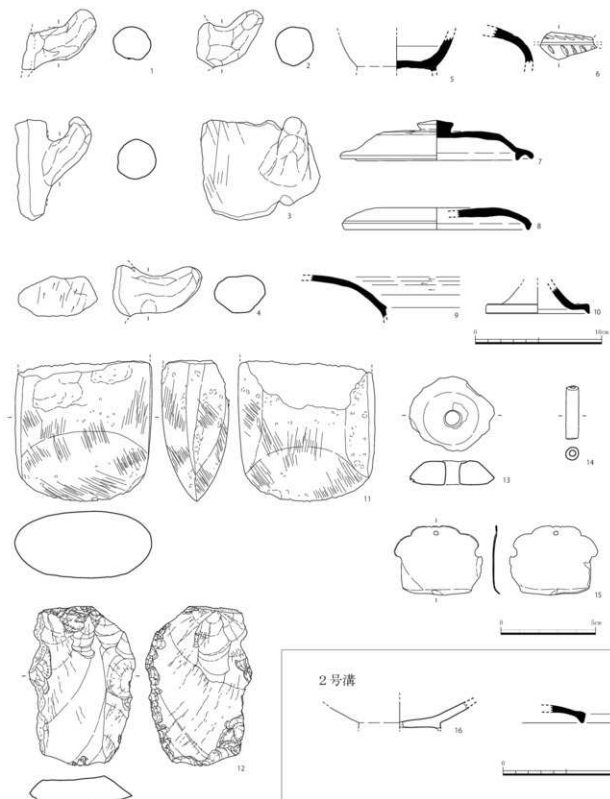


第22图 3号沟状遺構実測図 (平面図: 1/100、断面図: 1/40)

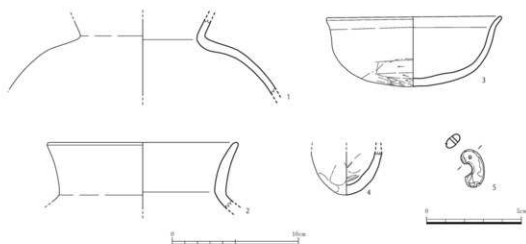


第23图 1号沟状遺構出土遺物実測図(1/3)

1号溝



第24図 1号及び2号溝状遺構出土遺物実測図 (1 1~1 5が1/2、その他は1/3)



第25図 3号溝状遺構出土遺物実測図（5は1/2、それ以外は1/3）

内湾しながら立ち上がる。13、14は頸部付近に稜が残る。16は底部に黒斑が残る。17は内外面に横方向のミガキが施される。19は土師器皿である。20～25はミニチュア土器で26は高坏である。27は土製模造鏡である。摘まみ上げて紐が造られている。鏡面に調整等は施されていない。

出土遺物（第24図、図版10、11）

1～4は土師器の甕把手である。5は須恵器の甕である。6は須恵器のハソウである。7～9は須恵器の坏蓋で7には宝珠摘みが残る。10は須恵器高坏の脚部である。11は磨製石斧である。石材は砂岩か。12は剥片石器である。石材は安山岩か。13は石製の紡錘車である。石材は不明。14は石製の管玉である。石材は碧玉製か。15は青銅製の金具（飾り具か）と考えられるが、正確な用途は判断できなかった。

2号溝状遺構（第21図、図版7）

調査区の西側、1号溝状遺構の北側をほぼ平行して東から西に向かって流れる溝である。長さは35m+aで、幅1.0m前後で深さは45cm前後を測る。東端から約20m地点で4号竪穴建物跡を切っている。

出土遺物（第24図、図版10、11）

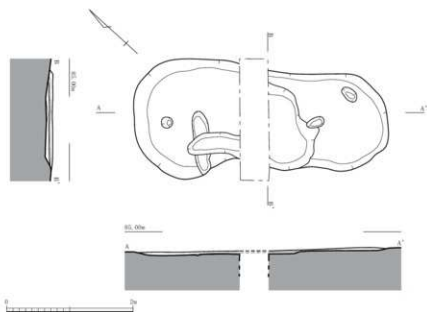
16は土師器の碗である。高台の一部が残る。17は須恵器蓋片である。

3号溝状遺構（第22図）

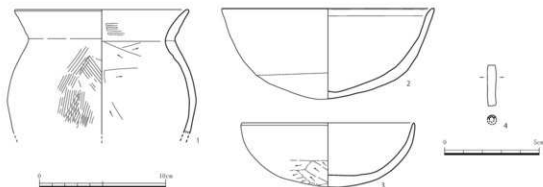
調査区の西側、1号溝状遺構にほぼ直行する形で南北に伸びる溝である。幅約50cmで深さは10cm～20cmと浅い。南から北側に傾斜している。3号竪穴建物跡の周溝から伸びるように発しており、南から4m付近で東西に分岐する。この分岐付近で勾玉が出土している。

出土遺物（第25図、図版11）

1、2は土師器の甕である。2は口縁部が緩やかに外反しながら立ち上がる。3は土師器坏である。口縁部が外反しながら立ち上がる。底部に黒斑が残る。4はミニチュア土器である。5は石製の勾玉である。石材は硬玉製か。



第26図 1号土坑実測図 (1/60)



第27図 1号土坑出土遺物実測図 (1~3は1/3、4は1/2)

1号土坑 (第26図)

調査区中央部に位置し、東西 1.5m × 南北 5.0m の楕円形を呈し、深さは 10cm 前後で浅く、底面はほぼ平坦である。平面検出時には部分的に焼土が確認されている。埋土は黒褐色土を呈する。

また、中央部を東西に走る現代の水田区割りの影響を受けている。

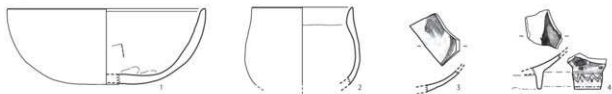
出土遺物 (第27図、図版11)

1は土師器甕である。頸部付近に接合痕が残る。2、3は土師器坏である。2は口縁部がやや外側に向かって垂直に立ち上がる。3は口縁部が垂直に立ち上がる。4は石製の管玉である。石材は碧玉製か。

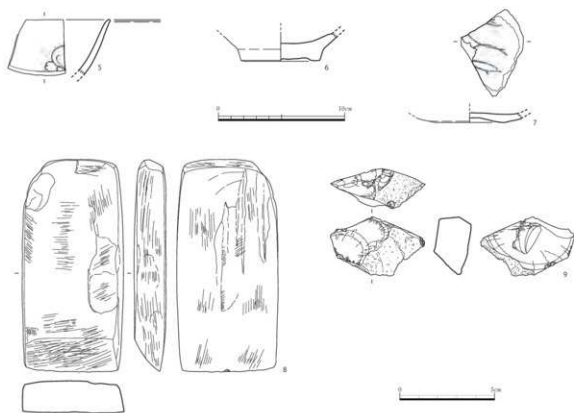
ビット出土遺物 (第28図、図版11)

1は土師器坏である。口縁部は垂直に立ち上がる。2は土師器の小型壺である。内面にスガが付着している。3は青磁碗である。内面に柳掻き文が施されており、外面には貫入が見られる。4は染付碗である。高台部分のみ残存している。

ビット



検出時



第28図 ビット出土遺物及び検出時の出土遺物実測図 (1/2、1/3)

検出時の出土遺物 (第28図、図版11)

5～7は青磁碗である。5は口縁部が緩やかに外反しており、内面に線刻文が施されている。6、7は底部のみ残存しており、6は内面にのみ施釉が施される。7は基筒底で内面に線刻が施され、貫入が見られる。8は磨製石斧である。石材は流紋岩か。9は石核と考えられる。石材は泥岩(または扮岩)か。

第5章 総括

以上、鍛冶屋廻り遺跡2次調査、本村遺跡5次調査の調査内容について述べてきた。鍛冶屋廻り遺跡2次調査では、19基の土坑、1条の溝状遺構、ピットが数基確認され、本村遺跡5次調査では、5軒の竪穴建物跡、1軒の掘立柱建物跡、3条の溝状遺構、1基の土坑、複数のピットが出土している。最後にこれらの遺構の時期や性格について述べてまとめたい。

(1) 鍛冶屋廻り遺跡2次調査について

前述した通り、当遺跡からは土坑が多く検出されているが、検出されているのは全体的に調査区の北側に集中する。これらは、調査区周辺の本来の地形が、南から北側に向かって傾斜しており、それが後世に削平を受けた為に、南側で遺構が少なく、北側に集中するという状況になったものと考えられる。

土坑について、遺物が確認されており時期が確認できる遺構として2・3・4・6・8・10号に関しては、弥生時代後期後半頃の土坑であると考えられる²¹⁾。これら以外の土坑に関しても、遺構埋土が類似している事からほぼ同時期のものであると考えておきたい。

溝状遺構について、出土した遺物が非常に少量で図示が可能な遺物として石鏃を挙げているが、当該期に掘削された遺構とは考えにくく、明確な時期は不明である。しかし、遺構が少ない南側で検出されている事や地形の傾斜に対して平行するように東西に直線に伸びる事などから、今回検出されている土坑よりも新しい時期の区画溝のような遺構であった可能性を考えておきたい。

今回の調査で、従来この谷部で確認されていなかった弥生時代の遺構が確認されたことで、この谷部周辺にも弥生時代の遺跡が展開する可能性が広がったことは一つの成果といえる。

(2) 本村遺跡5次調査について

当調査地では、遺構密度が谷側に近い北西で高く、山側に近い南東では低い状況が確認された。これは、鍛冶屋廻り遺跡と同様に旧地形によるものであると考えられる。

竪穴建物跡について、1号竪穴建物跡は出土遺物から6世紀中頃の住居跡と考えられ、北側にカマドが敷設されている²²⁾。カマドを持つ住居は小迫の谷部としては、尾部田遺跡、平田遺跡、花ノ木遺跡に続く4例目の発見となる²³⁾。また、4本ある主柱穴の内、西側2つには柱が残存しており、木材は広葉樹のサカキで底部に加工痕が残る。このサカキは、近現代でも建築材や農耕具などに使われる重硬で強靱な材であり、住居を建てる際にこうした木材の選定を行っていたと考えられる²⁴⁾。

また、詳細は今後の報告に委ねるが、出土した主柱穴で放射性炭素年代測定を行っており、6世紀中頃～7世紀中頃の年代値が得られている。多少の時期幅はあるが、この結果は、出土遺物で起こった住居跡の時期比定を迫るものになったと考えられる²⁵⁾。

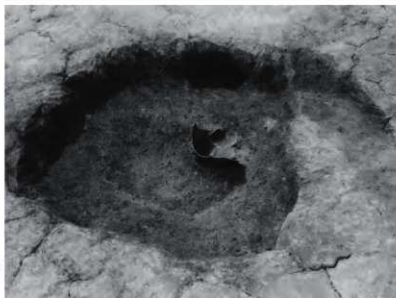
3号竪穴建物跡は、4本の柱穴と2条の周溝のみ検出されており、建物内の南側と北側で一部焼土が確認されている事から向きを変えた建て替えが行なわれたと考えられる。また、この建物跡の周溝と3号溝状遺構は接続しており、周溝にともなう排水路としての可能性を考えておきたい。

4号竪穴建物跡の時期は、出土遺物から1号建物跡などと同時期と考えられるが、主柱穴などを確認することができなかった。

写真図版 1



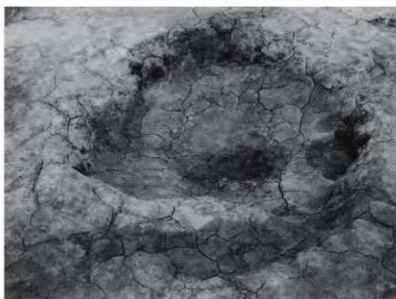
鍛冶屋廻り遺跡 2次調査地空中写真 真上から（上が北）



鍛冶屋廻り遺跡 2次 3号土坑発掘状況 (東から)



鍛冶屋廻り遺跡 2次 4号土坑完掘状況 (南から)



鍛冶屋廻り遺跡 2次 5号土坑完掘状況 (南から)

写真図版 3



本村遺跡 5 次調査地空中写真真上から（下が北）

本村5次 1号竪穴建物跡発掘状況（南から）



本村5次 1号竪穴建物跡カマド発掘状況（南東から）



本村5次 2号竪穴建物跡完掘状況（南から）



写真図版 5



本村5次 3号竪穴建物跡完掘状況（南から）



本村5次 4号竪穴建物跡完掘状況（西から）



本村5次 左：1・2号溝状遺構完掘状況（東から） 右：1号溝状遺構土層断面（東から）



写真図版 7





写真図版9





報 告 書 抄 録

ふりがな	あさひのいせきⅡ かじやまわりいせきⅡじ・ほんむらいせきらじのちようさ
書名	朝日の遺跡Ⅱ 鍛冶屋廻り遺跡2次・本村遺跡5次の調査
副書名	県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	(2)
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第111集
編著者名	上原翔平・若杉竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1 0973(24)7171
発行年月日	2014年(平成26年)3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鍛冶屋廻り遺跡 2次	大分県日田市 大字小迫	44204-6	204084	130° 55' 11"	33° 20' 38"	20120723 ～ 20120824	560㎡	圃場整備
本村遺跡 5次	大分県日田市 大字小迫	44204-6	204230	130° 55' 31"	33° 20' 46"	20120822 ～ 20121121	2,498㎡	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鍛冶屋廻り遺跡 2次	集落	弥生	土坑19基 溝状遺構1条	弥生土器 石器(石鏃・石匙)	
本村遺跡 5次	集落	古墳	竪穴建物跡5軒 掘立柱建物跡1棟 溝状遺構3条 土坑1基	土師器・須恵器 石器(石鏃・石斧)	

要 約	<p>鍛冶屋廻り遺跡2次調査地は、日田盆地北部の吹上台地と辻原台地の谷部、標高約84mの沖積面に所在する。今回の調査では、従来周辺で確認されていなかった弥生時代の遺構が確認されたことで谷部周辺にも弥生時代の遺構が展開する可能性がある。</p> <p>本村遺跡5次調査地は、日田盆地北部の吹上台地と辻原台地の裾部から谷部の標高約80m前後の沖積面に所在する。今回の調査では、6世紀代のカマドが敷設された住居跡や東西に平行に伸びる大小の溝状遺構が発見された。調査の結果、調査地周辺では、古墳時代に小規模な集落が営まれ、その後、古代になるとこの集落域を水田として利用するという土地利用の様子が伺うことが出来た。</p>
-----	--

朝日の遺跡Ⅱ

鍛冶屋廻り遺跡 2 次・本村遺跡 5 次の調査

2014 年 3 月 19 日

編 集 日田市教育庁文化財保護課
〒 877-0077 大分県日田市南友田町 516-1

発 行 日田市教育委員会
〒 877-0023 大分県日田市田島 2-6-1

印 刷 日田時報紙器印刷株式会社
〒 877-0086 大分県日田市二串町 345-3



日田市